

スにあって存在をつづけるのだ」と魂の永生を声高らかに主張し、スペインのキリスト教神秘主義の聖テレジアの詩「配所の嘆き」は、地上の生活を「配所」と見て、「あなたに会うために／私は死にたい」「私をここから出してください／あなたに会うために」と歌う。

また、ガン患者としての限界状況の中で宗教学者岸本英夫は『わが生死観』の中で、「死というものは、そのものが実体ではなくて、実体である生命がない場所であるというだけのことである」と自らの達した認識を記している。

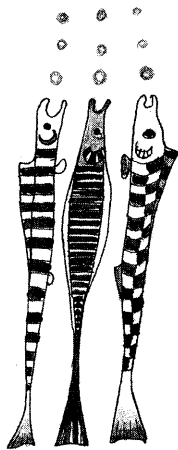
識を記している。

「死について考えるには、現代生活においては余程の時間的な贅沢が要求されるのである。働いている人の大部分にとっては、死は他人に起こる事件に過ぎない」と編者も言うが、にもかかわらず死は、言うまでもなく、私たち一人一人にとって決定的なことからある。古来の銘句「メモメント・モリ（死を想起せよ）」が告げるように、心静かに過ごせる季節こそ死を思索するにふさわしい季節なのではなからうか。

（お茶の水女子大学）

『ウイリアム・モリス伝』

フィリップ・ヘンダーソン 著（晶文社）



皆川美恵子

ケイト・グリーンナウエイ（一八四六～一九〇二）、ウォルター・クレイン（一八四五～一九一五）といっ

た名高い絵本作家が活躍した時代のイギリスでは、自らの内に秘められた黄金を黄金として発揮しようする人々

が数多く集い合い、互いに友愛の光輝をも散乱させながら、十九世紀の世紀末芸術を虹の帯のように彩っていた。

ジョン・ラスキン（一八一九—一九〇〇）の芸術思想を継承し、虹の輪を弥増して大きく濃きようにと、もてるかぎりの力を尽くし、自らも、建築、装飾、文学、書物出版など、幅広い分野で生活芸術の創造者となり、社会主義者としても目覚ましい活動をした巨人に、ウィリアム・モリスという人物がいる。一八三四年三月二十四日に生まれ、一八九六年十月三日に惜しまれながら六十二年の生涯を終えた。そのモリスの伝記が本書である。訳者解説によると、モリス没後から今日までの約一世紀間に、何とイギリスでは五十篇余りの伝記が出版されているとのことである。

私は、最近になってモリスのことが興味深く思われるようになった。その仲立ちには、日本でのモリス紹介者として著名だった故小野二郎氏の著作と、小野二郎氏の弟子にあたる本書の訳者でもある川端康雄氏に

拠っている。雑談という日常生活のつましやかな喜びを川端氏と繰り返しているうちに、小野二郎氏の人と仕事についての関心が触発され、小野二郎氏の生の軌跡の陽気な輝きから、さらにウィリアム・モリスの人と仕事に興味を抱くようになった。

モリスの目指した「人間の芸術活動の総体、本質」については、小野二郎氏の名著『装飾芸術』や『紅茶を受皿で』の論究が、今もって上質な読み手を待ちかまえている。そして聞くところによると、モリスの仕事は、今や、そのユートピア構想が、現代の労働や余暇、人間の基本的欲求、マルキシズム再考などの問題をも孕んで、熱い視線を受けて見直される機運にもあるらしい。それら仕事上の論評はここでは扱き置きいて、私には本書の重さを確かめながら読了してみて、芸術に魅せられた人々の情熱の源泉や方向性に裏うちされた、人生という装飾——生（そして死）の模様が浮き上がってくる興奮に襲われた。そのことについて言及してみたい。

モリスは、一八五三年オックスフォード大学に入学し、そこで生涯の友人を数多く得ている。「兄弟団」(ブラザーフッド)と名づけられたそれらの友人を基盤に、やがて芸術職人集団を組織し、モリス商会を設立して実業家として奮闘し、世紀末の芸術運動を推進していく。モリスにとって殊更に親しい友は、大学の入学試験で隣席となったエドワード・バーン・ジョウズだが、この二人は一冊の書物『アーサー王の死』(トマス・マロリーがアーサー王伝説を集大成した書物。一四七〇年頃完成。)と出会うことよって強い絆で結びつき、人生を導く同じ基調を共に歩むことになっていく。

さて、その『アーサー王の死』とは、神秘的な宗教と高貴な騎士道的行為が交響した、人名や地名にひそむ失われた歴史とロマンスの世界が盛り込まれたケルトの伝説(神話)で、当時のロマン主義的芸術のヴェジョンを抱く者にとって、靈感の源泉であった。

やがて青春時代の彼らに、異性としての女性が登場してくるようになる。この女性の登場によって、伝記宇宙はまるでモリスの装飾芸術における、古代の魔法のかかったケルトの森の茂みの中の、フローラや木の実や鳥のように、女性が美しい色彩をもって耿耿と光を放っていくのだ。

バーン・ジョウズンの妻となるジョージアーナの美しい眼については、たとえば、ある人により次のように語られる。「ジョージアーナ・バーン・ジョウズンのような眼にお目にかかったことは後にも先にもない。私たちは長いこと付き合ってきたが、彼女にまともに見つめられると、いつも我知らず自分の心中を多少なりとも省みざるをえなかった。それは批判や非難を恐れたからではなく、深い英知を湛えて水晶のように澄んだ彼女の眼が、見るに値しないものの上に止まらないようにするためだった。」

ウィリアム・モリスの妻となったジェインに至っては、その女性としての美しさは、ヘンリー・ジェーム

スの筆によってかくのようには描写される。「おお、それが何とお前、あのような夫人とは。驚嘆措く能わずだ——未だに脳裏に焼き付いている。ミサ典書の挿絵の切り抜き——と言いついては、彼女の印象はほんのかすかにしか伝えられない。なぜなら、そのような形象に生身の体を与えられると、度外れに恐ろしくかつ素晴らしき幽霊と化するのだから。一体、彼女は過去に描かれたラファエル前派の絵画すべての大いなる総合であるのか、それとも彼らの絵の方が彼女の〈鋭い分析〉であるのか、つまり彼女がオリジナルなのか、コピーなのか、どちらとも言いかねるのだ。いづれにせよ、彼女は一つの驚異だ。」

背が高く、やせた青白の顔、黒い豊かな長髪、そのジェインがロング・ドレスを身にまとい、モリス、バーン・ジョウンス、ロセッティのモデルをつとめたことは有名である。彼女こそは、イギリス世紀末芸術の女王であり、夫は勿論、夫の友人たちに幻と理想を与えた貴婦人であった。自然が生み落とした秘跡（ミ

ステリー）のような女性であった。

ところでモリスは、妻となる前のジェインをモデルにアーサー王の妃グウィネヴィアの絵を描いた。しかし絵が完成に至るには、ロセッティ、そしてマドック・ブラウンの手が加わって初めて仕上がったという謂われがある。またモリスはジェインと家庭を築くため、友人フィリップ・ウェップに設計を依頼し、「レッド・ハウス」を建築する。中世の趣きをもった、歴史感覚を備えたロマンスに溢れた、しかし気取らないその家は、五年間、住んだだけで手放すことになる。イギリス住宅建築に大革命をもたらし、モリスの装飾芸術において記念碑的な理想の館——「レッド・ハウス」に安住することがかなわなかった。

モリスとジェインは、二人だけの家庭的幸福を獲得することができなかった。伝記作者は、ジェインとロセッティの親密な交際を明らかにしている。モリスは、ある友人にこう書いている。「人生は空虚なものではなく、無意味に作られたものでもなく、何らの形

でその各所が相互に調和し合っているのであり、世界は、美しく、不可思議に、恐しく、そして崇敬の念に満ちて、動き続けているのだ」と。

ケルト神話、アーサー王の物語には、妃グウィネヴィアに裏切られる王の苦悩が描かれている。三人によって織りなされる自由と哀しみ。三の主題はケルト神話において、他にも三人の妖精女王、その女王も三相一体で、つまりは九つの相をもつなど、マジカル・ナンバーとなっている。一によって全体を支配するのでもない、二によって細部に閉塞するのでもない。(トライアド)の変幻自在さは、古代の海や森の深遠な不可思議さ、豊かな自然の成長を開示するかのような神秘に満ちている。

「自然は芸術を模倣する」とは、オスカー・ワイルドの言葉だが、モリスの結婚は、まことにケルト的自
然から生み出された芸術を模倣しているかのようである。しかしモリスは、その模倣によって芸術の秘密を得て、自分の人生という装飾芸術をそこからこそ築きあげていったように思える。それは、どのようにしてかという点、同じ森の生命すべてを存分に引き立て、自らも濃密に輝き、人類の歴史を含んだ自然への崇敬を形にしていくことである。そのような気高い王者の所行こそ、モリスが「建築」と呼び「装飾」と呼び慣らわしていたものだろう。王者の伝記を読み終えた味わいがした。
(十文字学園女子短期大学)

『雪の夜に語りつぐ』——ある語りじさの昔話と人生

笠原政雄 語り・中村とも子 編 (福音館)

近藤伊津子